

第 3 期

南丹市人口ビジョン

〈素案〉

目 次

1. 人口ビジョンについて	1
(1) 南丹市人口ビジョンの位置づけ	1
(2) 対象期間	1
2. 人口の現状	1
(1) 人口推移	1
① 総人口	1
② 年齢別人口	1
③ 人口構造	2
(2) 人口動態	3
① 自然動態	3
② 社会動態	4
3. 将来人口の見通し	6
(1) 南丹市のすう勢人口の見通し	6
(2) 将来人口シミュレーション	7
(3) 人口の将来展望	9
① 南丹市における人口動向・構造の課題	9
② 将来を見据えた人口問題に対する取り組みの考え方	9
(4) 目指すべき将来の目標人口と展望	10
① 目標人口	10
② 目標人口に基づく将来展望	11

1. 人口ビジョンについて

(1) 南丹市人口ビジョンの位置づけ

南丹市人口ビジョンは、人口減少に伴う地域課題に対応するために、国の「長期ビジョン」を勘案しつつ、人口の現状を分析し、今後目指すべき将来の方向と人口の将来の展望を提示するものです。また、同時に策定する「第3期南丹市地域創生戦略」の目標設定や、必要な施策・事業を検討する上で、重要な基礎資料となります。

(2) 対象期間

南丹市人口ビジョンの対象期間は、国の「長期ビジョン」や改定前の「人口ビジョン」と同じく、令和42（2060）年までとします。

2. 人口の現状

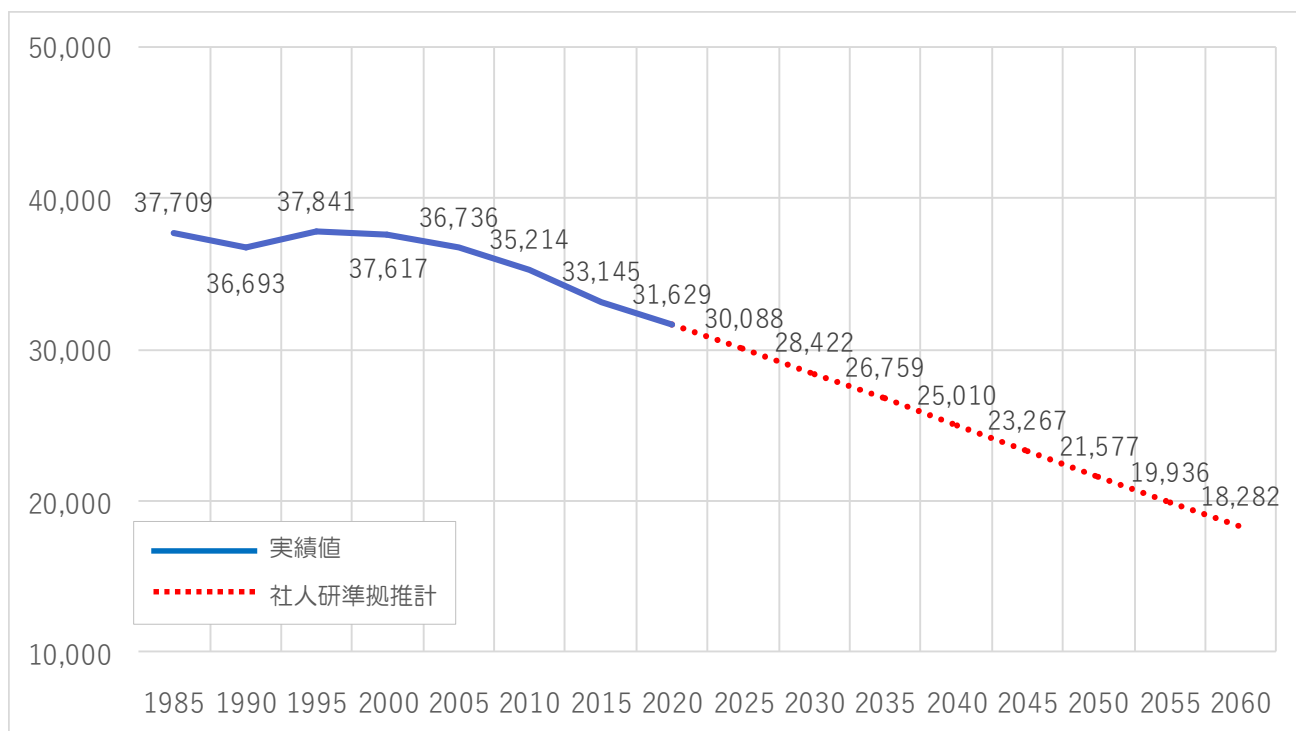
(1) 人口推移

① 総人口

南丹市では、1995年（平成7年）以降、減少を続けており、2020（令和2年）の総人口は30,088人となり、約6,000人減少しています。

また、令和5年12月に公表された国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）の推計に準拠したシミュレーションでは、2020年からの40年間で約13,000人減少し、2060年には18,282人にまで減少すると推計されます。

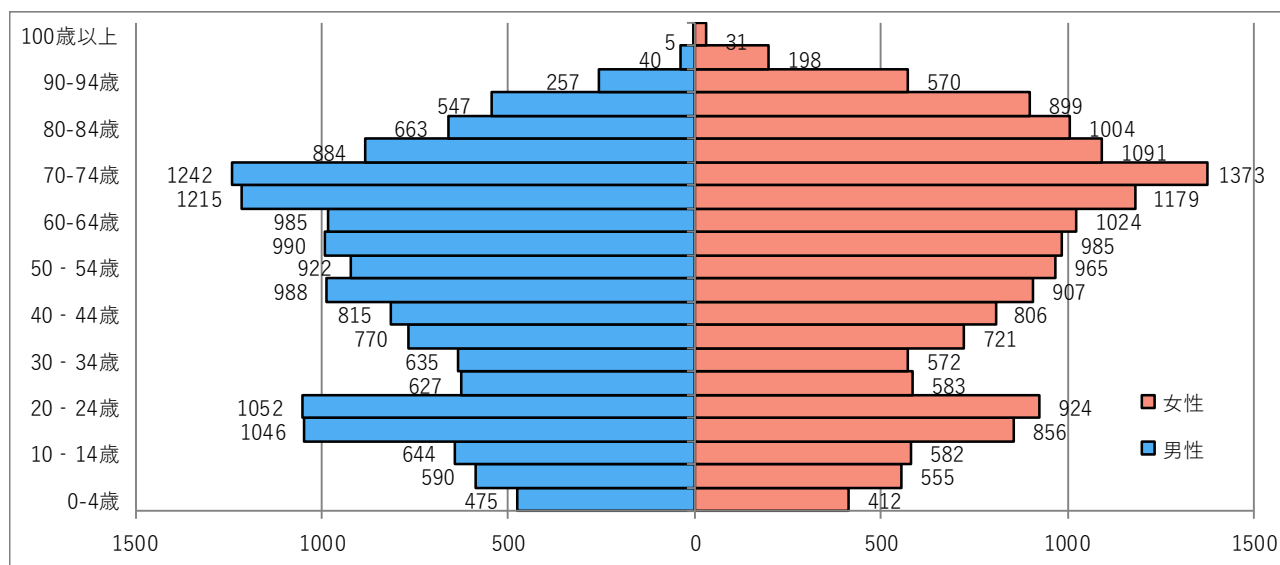
◆ 総人口の推移と社人研準拠推計



②年齢別人口

2020 年の南丹市の5歳階級別の人口構造をみると、団塊の世代を含む 65 歳以上の人口の割合が大きくなっている一方、14 歳以下の人口の割合は小さくなっており、今後さらに少子高齢化が進むことが予測されます。

一方で、大学や高校があることから、15～24 歳の若い世代の人口も多く、今後も一定数が確保できることが予測されます。

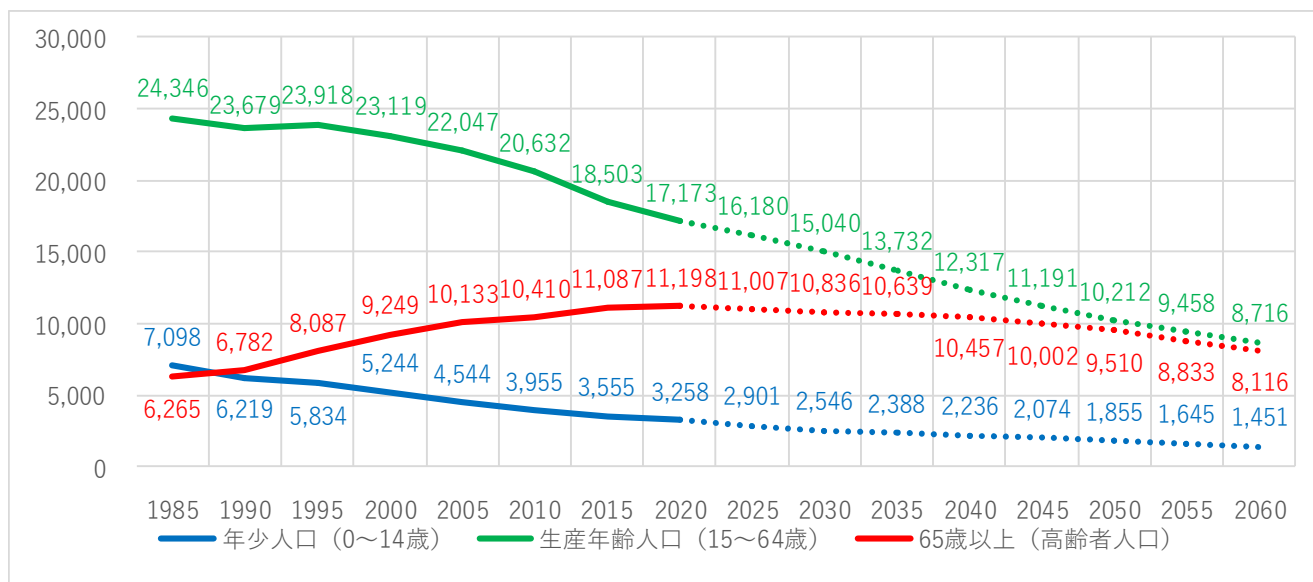


③人口構造

年齢3区分別の人口構造の推移についてみると、高齢者人口は 1990 年に年少人口を上回り、増加が続くのに対し、年少人口及び生産年齢人口は減少の一途を辿っており、少子高齢化がさらに進行している状況です。

また、社人研推計に準拠したシミュレーションでは、高齢者人口はほぼ横ばいであるのに対し、生産年齢人口は 2020 年からの 40 年間で約 8,500 人減少し、高齢者人口に近づくものと推計されます。年少人口も 40 年間で約 1,800 人減少すると推計され、少子高齢化がより深刻になるものと考えられます。

◆年齢3区分別人口構造の推移と社人研準拠推計



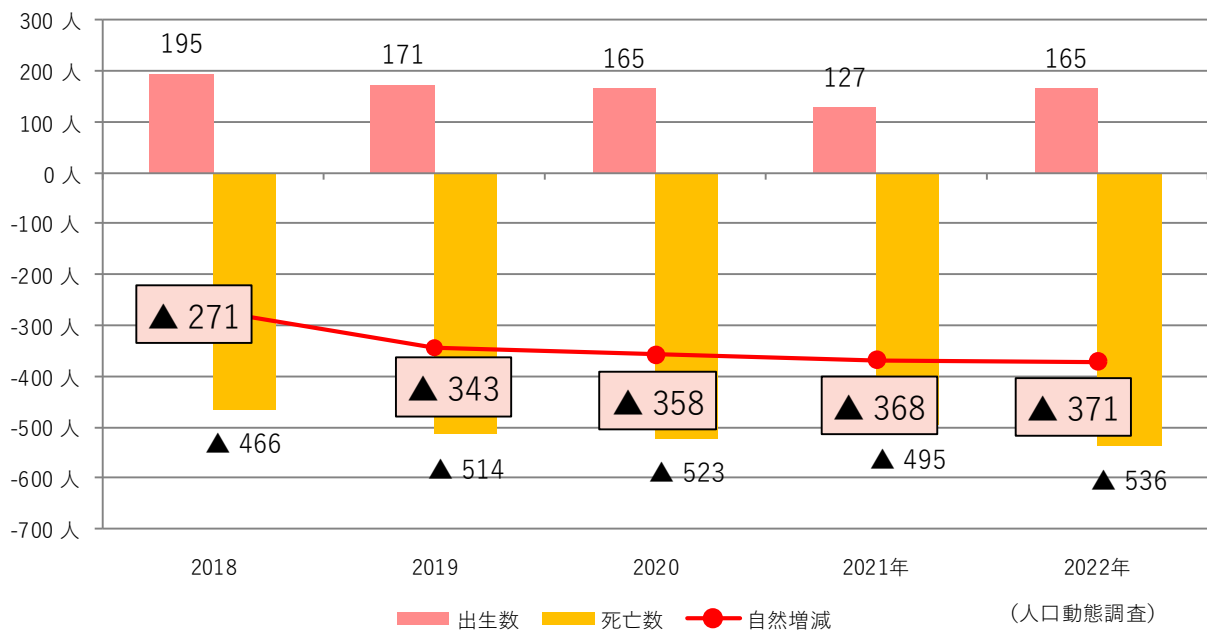
(2) 人口動態

① 自然動態

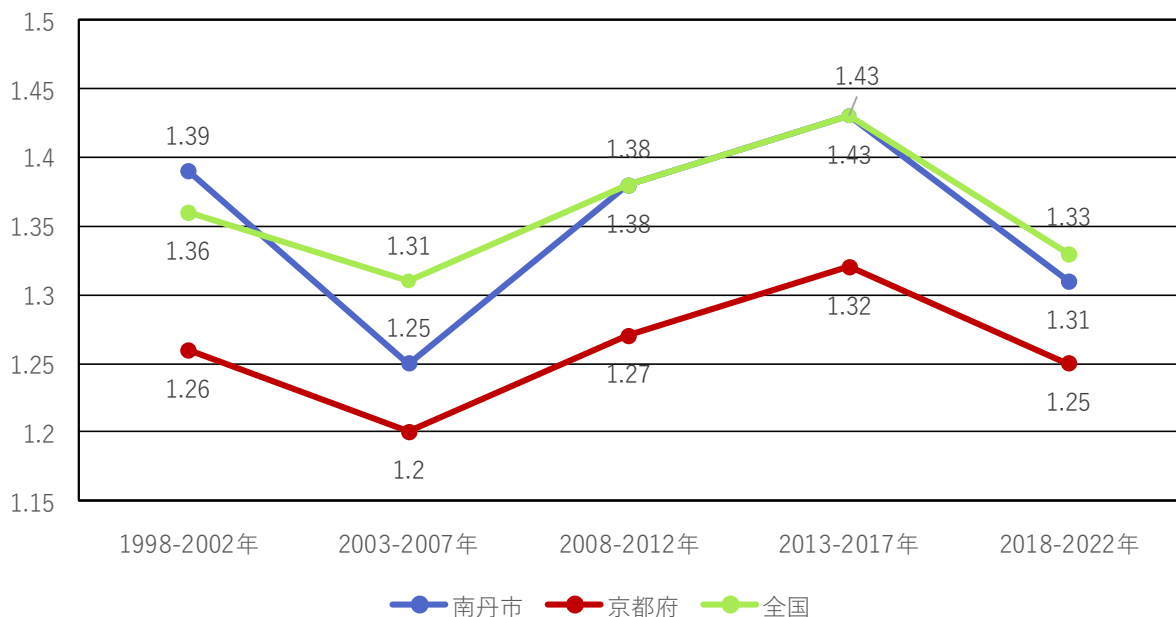
2018～2022年の5年間の出生・死亡者数をみると、出生数は横ばいですが、死亡者数は増加しており、すべての年で自然動態は、マイナスとなっています。

合計特殊出生率の推移をみると、南丹市は京都府をやや上回っており、概ね全国平均に近くなっています。

◆自然増減の推移



◆合計特殊出生率

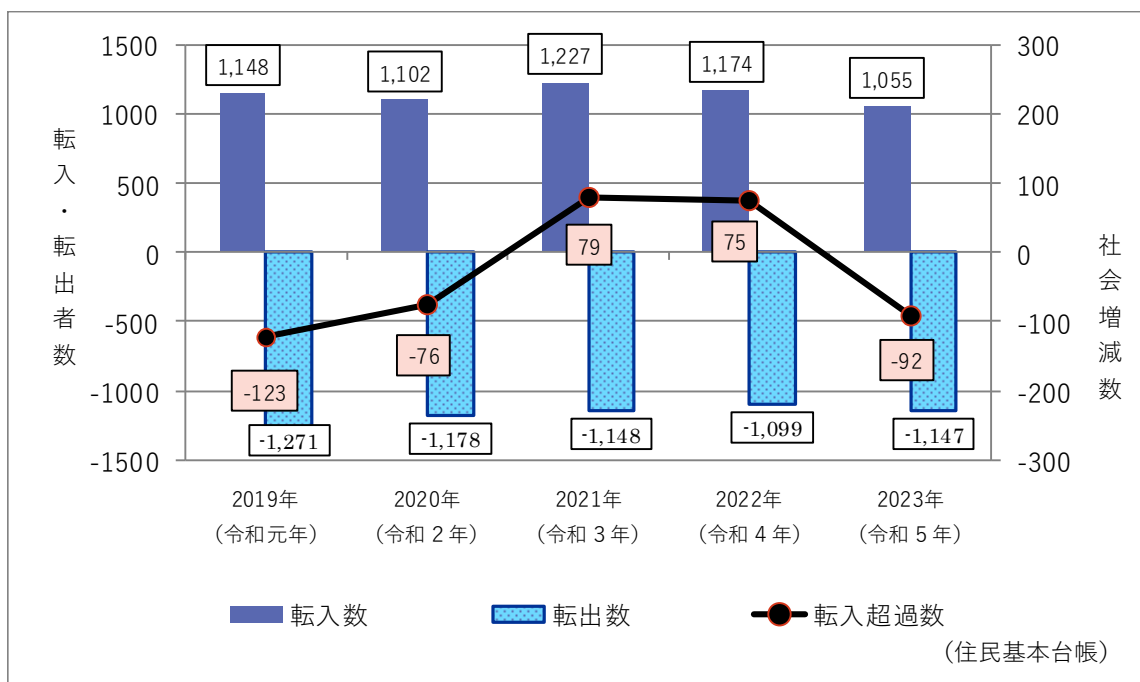


② 社会動態

2019～2023年の5年間の転入・転出者数をみると、2021年および2022年を除き、転出増加となっています。

2023年の転入・転出の状況を性別・年齢3区分別にみると、男性・女性ともに20～24歳の転出が多くなっています。進学・就職・結婚等の移動を伴うライフイベントが主要因であると考えられます。

◆転入・転出の推移

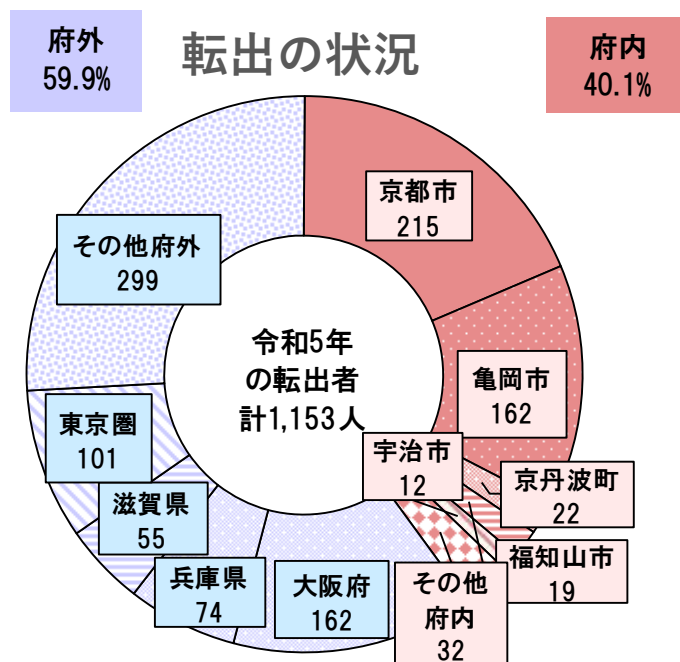
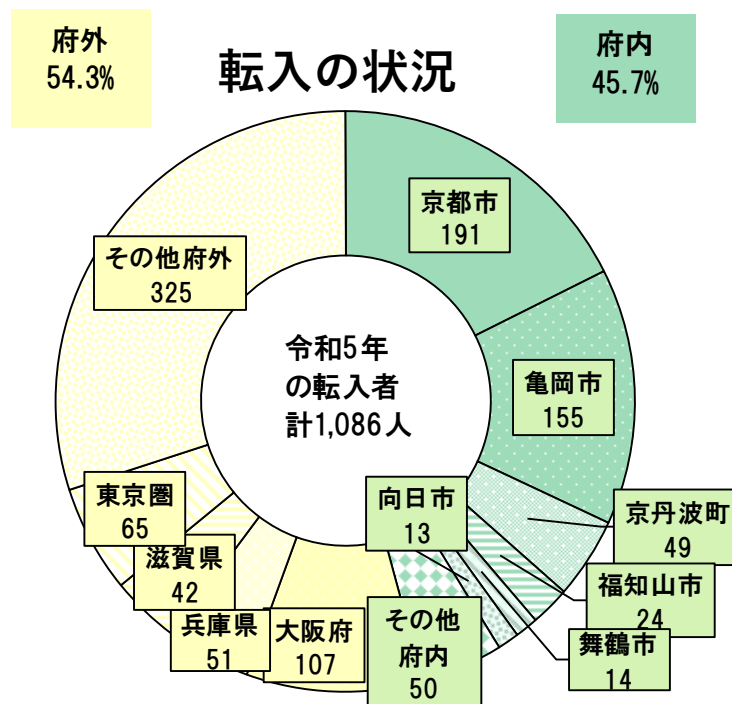


◆性別・年齢5歳階級別の転入・転出の状況

(人)		純移動		転入		転出	
		男(純移動)	女(純移動)	男(転入)	女(転入)	男(転出)	女(転出)
年少人口	0～4歳	8	6	30	22	▲ 22	▲ 16
	5～9歳	12	9	16	19	▲ 4	▲ 10
	10～14歳	3	4	11	12	▲ 8	▲ 8
	計	23	19	57	53	▲ 34	▲ 34
生産年齢人口	15～19歳	54	31	77	49	▲ 23	▲ 18
	20～24歳	▲ 153	▲ 84	96	80	▲ 249	▲ 164
	25～29歳	▲ 14	2	93	78	▲ 107	▲ 76
	30～34歳	6	▲ 4	68	46	▲ 62	▲ 50
	35～39歳	▲ 2	▲ 2	39	28	▲ 41	▲ 30
	40～44歳	▲ 5	12	23	31	▲ 28	▲ 19
	45～49歳	▲ 2	0	27	17	▲ 29	▲ 17
	50～54歳	12	2	30	20	▲ 18	▲ 18
	55～59歳	6	3	18	13	▲ 12	▲ 10
	60～64歳	6	▲ 1	15	10	▲ 9	▲ 11
	計	▲ 92	▲ 41	486	372	▲ 578	▲ 413
老年人口	65～69歳	0	1	9	10	▲ 9	▲ 9
	70～74歳	4	5	10	12	▲ 6	▲ 7
	75歳～	5	▲ 16	18	28	▲ 13	▲ 44
	計	9	▲ 10	37	50	▲ 28	▲ 60
合計		▲ 60	▲ 32	580	475	▲ 640	▲ 507

(2023年,人口移動報告)

2018 年の転入・転出の状況を居住地別にみると、府内では京都市・亀岡市が転入・転出ともに多くなっています。府外では、東京圏への転入・転出は少なく、関西での移動が多くなっています。



3. 将来人口の見通し

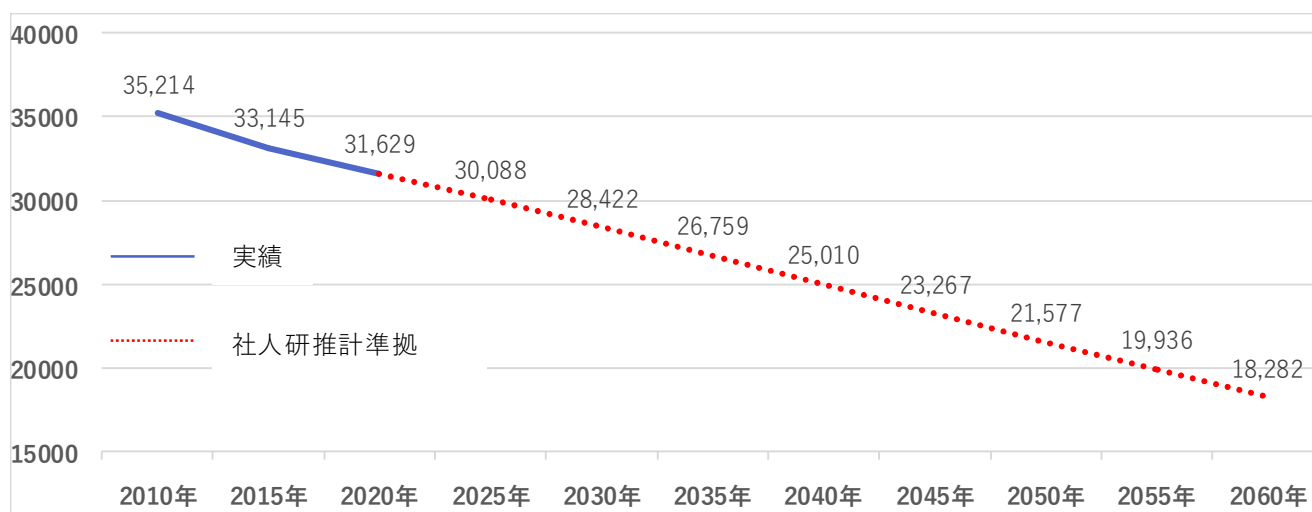
(1) 南丹市のすう勢人口の見通し

戦略的な人口政策の取り組みを想定せず、推測される将来の人口を「すう勢人口」と言います。

南丹市は、前回同様に、すう勢人口の見通しは、社人研による推計に準拠し、次のような仮定に基づいて推計します。

3要素	将来設定の基本的な考え方
出 生	原則として、2020年の全国の子ども女性比（15～49歳女性人口に対する0～4歳人口の比）と南丹市の子ども女性比との比をとり、その比が2025年以降2050年までおおむね維持されると仮定。
死 亡	原則として、55～59歳→60～64歳以下では、全国と京都府の2015年→2020年の生残率の比から算出される生残率を適用。60～64歳→65～69歳以上では、これに加えて、京都府と南丹市の2000年→2020年の生残率の比から算出される生残率を適用。
移 動	原則として、平成17（2005）～22（2010）年、平成22（2010）～27（2015）年、平成27（2015）～令和2（2020）年の3期間に観察された地域別の平均的な人口移動傾向が令和27（2045）～32（2050）年まで継続すると仮定。

◆すう勢人口



【推計の結果】

- ・ 南丹市のすう勢人口は、今後も一貫した減少傾向で推移する見込み。
- ・ 2025年には、30,088人まで緩やかに減少する見込みとなっているが、2024年10月1日住基人口で29,654人であり、既に推計値を下回っている。
- ・ 2060年には18,282人にまで減少する見込み。

（２）将来人口シミュレーション

すう勢人口の見通しを踏まえ、2020 年以降を対象に、出生動向と移動動向を次のような仮定し、3 つのケースの将来人口のシミュレーションを行います。

★ ケース1 すう勢人口＋出生率上昇

★ ケース2 すう勢人口＋出生率上昇＋転入増（純移動が、ゼロ以上で）

区分	ケース1（国準拠）	ケース2（国準拠）
出 生	2025 年以降について、合計特殊出生率が 2030 年に 1.8、2040 年に人口置換水準（2.07）まで上昇、その後は 2.07 を維持するものと仮定。	2025 年以降について、合計特殊出生率が 2030 年に 1.8、2040 年に人口置換水準（2.07）まで上昇、その後は 2.07 を維持するものと仮定。
死 亡	すう勢（社人研推計準拠）と同様。	すう勢（社人研推計準拠）と同様。
移 動	すう勢（社人研推計準拠）と同様	2040 年に移動（純移動率）がゼロ（均衡）、以降は、転入増が続くと仮定。

【出生の見通し】

すう勢人口では、2035 年以降の合計特殊出生率が 1.32～1.34 程度で推移することが想定されていますが、若い年齢層の減少に伴い、出生数は減少の一途を辿ることが見込まれます。これに対し、ケース1～2 では、出生数が比較的安定的に推移することが見込まれます。

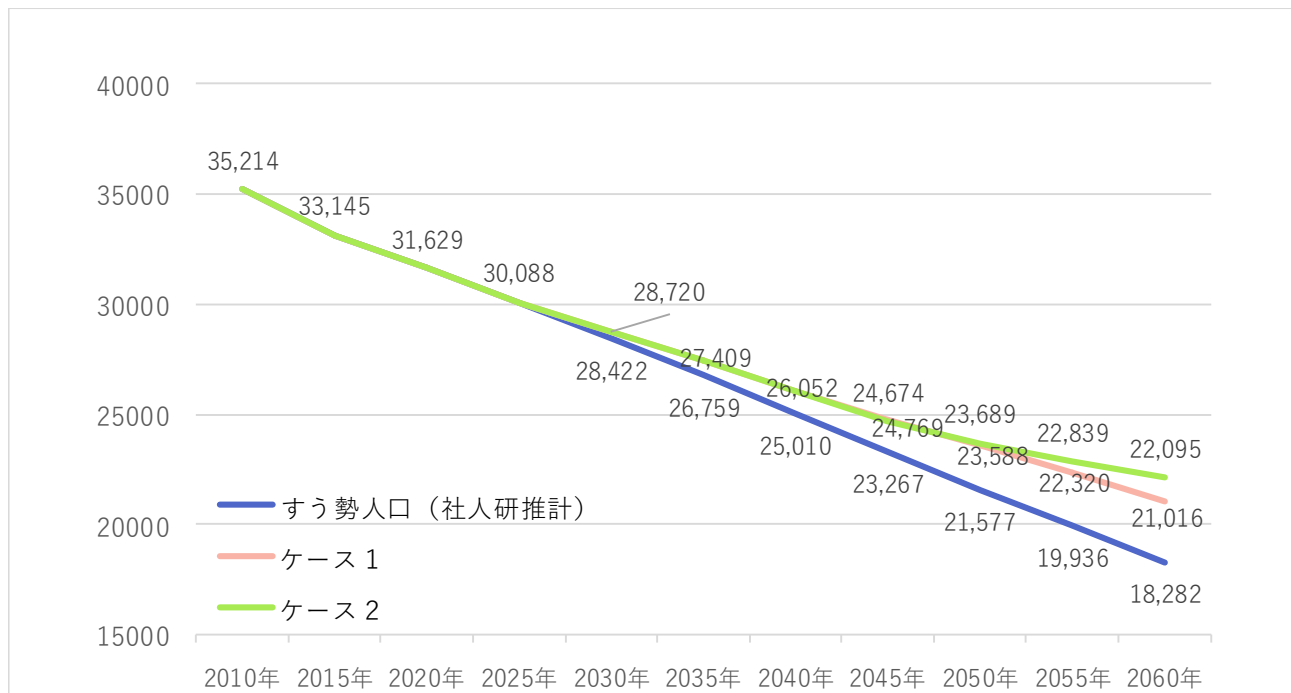
【死亡数の見通し】

死亡数については、すう勢人口や各シミュレーションにおいて、いずれも社人研推計準拠の設定を採用しています。したがって、すう勢人口や各シミュレーションにおける死亡数の差異は、出生数や移動数の違いに基づくものです。

【移動数の見通し】

すう勢人口とケース1 では全国的な縮小傾向を背景に、移動数が縮小していく推計となっています。ケース2 では、2040 年に移動（純移動率）がゼロ（均衡）となり、その後も転入増となるよう、移動率をなだらかに増加させており、2045 年には転入超過に転じることを想定しています。

◆将来人口シミュレーションの結果



区分	推計結果の概要
すう勢人口	2030年以降、5年間で1700人程度、1年間に340人程度、少しずつ減少する。 自然動態は、出生数が減少し続けるため、大きなマイナスを止められない。 社会動態は、純移動が緩やかなプラスを継続していく。
ケース1	2030年以降、5年間で1300人程度、1年間に260人程度、緩やかに減少する。 自然動態は、出生率を上げるが、マイナスは止められない。 社会動態は、純移動が緩やかなプラスを継続していく。
ケース2	2030年以降、5年間で1300人程度、1年間に260人程度、緩やかに減少し、2045年以降は5年間で1000人程度、1年間に200人程度でより緩やかに減少する。 自然動態は、出生率を上げるが、少しずつマイナスとなっていく。 社会動態は、純移動が2040年（移動均衡）以降、転入超過を継続していく。

◆年齢構造別人口の見通し

(人)	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
すう勢人口	31,629	30,088	28,422	26,759	25,010	23,267	21,577	19,936	18,282
0～14歳	3,258	2,901	2,546	2,388	2,236	2,074	1,855	1,645	1,451
15～39歳	7,786	7,209	6,762	6,183	5,545	4,924	4,472	4,039	3,706
40～64歳	9,387	8,971	8,278	7,549	6,772	6,267	5,739	5,419	5,010
65～74歳	5,009	4,288	3,868	3,811	3,807	3,579	3,189	2,780	2,417
75歳以上	6,189	6,719	6,968	6,828	6,651	6,423	6,322	6,053	5,699
ケース 1	31,629	30,088	28,720	27,409	26,052	24,769	23,588	22,320	21,016
0～14歳	3,258	2,901	2,844	3,038	3,278	3,153	2,957	2,758	2,648
15～39歳	7,786	7,209	6,762	6,183	5,545	5,347	5,381	5,310	5,242
40～64歳	9,387	8,971	8,278	7,549	6,772	6,267	5,739	5,419	5,010
65～74歳	5,009	4,288	3,868	3,811	3,807	3,579	3,189	2,780	2,417
75歳以上	6,189	6,719	6,968	6,828	6,651	6,423	6,322	6,053	5,699
ケース 2	31,629	30,088	28,720	27,409	26,052	24,674	23,689	22,839	22,095
0～14歳	3,258	2,901	2,844	3,038	3,278	3,164	3,069	3,061	3,079
15～39歳	7,786	7,209	6,762	6,183	5,545	5,544	5,741	5,850	5,517
40～64歳	9,387	8,971	8,278	7,549	6,772	6,141	5,595	5,373	5,600
65～74歳	5,009	4,288	3,868	3,811	3,807	3,515	3,112	2,672	2,295
75歳以上	6,189	6,719	6,968	6,828	6,651	6,311	6,172	5,882	5,510

(3) 人口の将来展望

① 南丹市における人口動向・構造の課題

すう勢人口は、2020年の31,629人から2060年には18,300程度へと減少することが見込まれますが、その減少の多くは死亡によるものです。

高齢化した人口構造を背景に、死亡数を大きく減少させることは困難と考えられるため、今後の人口政策としては、出生数の増加及び転入促進・転出抑制が重要になってきます。

② 将来を見据えた人口問題に対する取り組みの考え方

2020年の総人口31,629人から、今後のすう勢人口として2060年には18,300人程度にまで減少することが見込まれます。

本市では、こうしたすう勢人口を踏まえた上で、合計特殊出生率の上昇、住みやすい地域づくりや転入の増加などによる定住促進を図ることにより、長期的視点から人口減少の抑制に取り組み、その目標として目指すべき将来の目標人口を設定します。

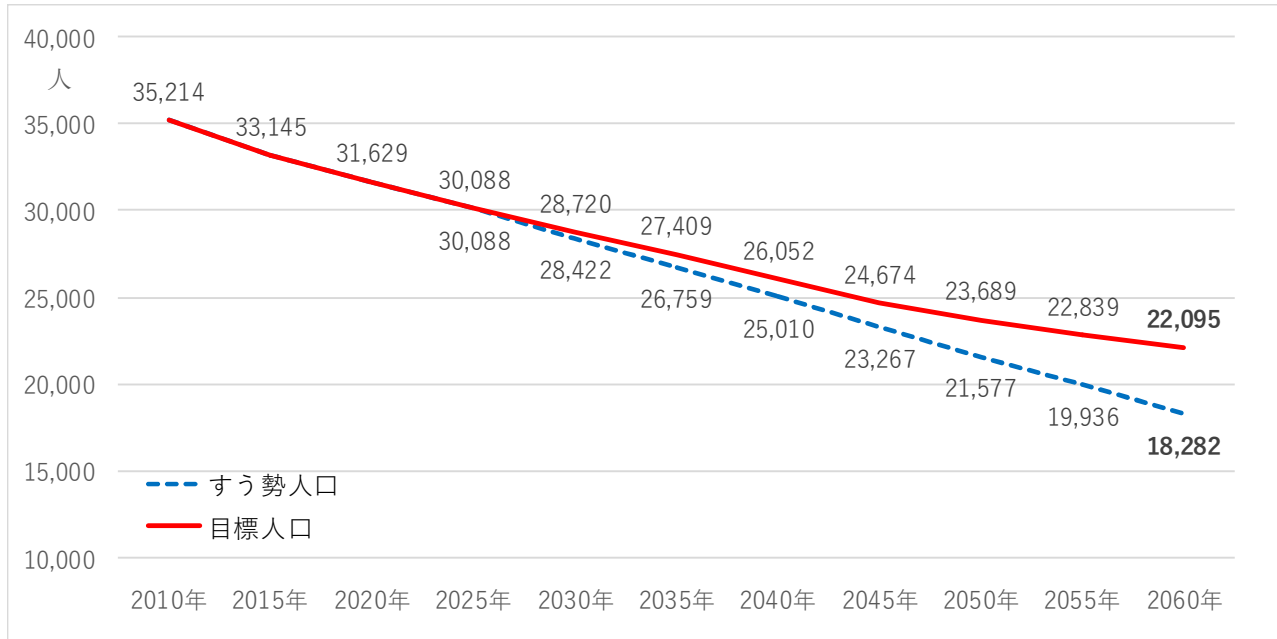
南丹市の将来の姿をともに見据えつつ、地域の豊かな資源と安心・快適な暮らしを次の世代へと受け継いでいくために、目標人口を達成するための地方創生の取り組みを「総合戦略」として明らかにし、その着実な遂行を図っていくこととします。

(4) 目指すべき将来の目標人口と展望

① 目標人口

少子高齢化、転出超過といった本市の人口問題に対して、長期的視点から取り組むことにより、2060年において、22,000人程度の人口規模を目指します。

なお、目標人口における合計特殊出生率及び社会移動については、次のように仮定しています。
(前述のケース2)。



【合計特殊出生率】

2025年以降について、合計特殊出生率が2030年に1.8、2040年までに人口置換水準(2.07)まで上昇、その後は2.07を維持するものと仮定。

【社会動態】

20代～30代の移動(純移動率(マイナス))が2040年までにゼロ(均衡)、以降は転入増が続くと仮定。

② 目標人口に基づく将来展望

〔年少人口〕

0～14歳の年少人口は、2040年には2020年と同程度まで回復し、その後は安定していくことが想定されます。

様々な子育て支援策は、目標人口達成の前提となる合計特殊出生率の上昇を実現するための手段のひとつであるとともに、その結果として出現する未就学の子ども数に応じた施策でもあります。

年少人口は、今後も現状程度の水準を維持することから、子育て支援へのニーズが大きく縮小することは想定しづらく、今後も少子化対策の観点からの取り組みが重要になってきます。

〔生産年齢人口〕

消費面、生産面からその多くを担うことが期待される生産年齢人口については、人口規模の縮小に伴い、長期的にも縮小傾向で推移する見通しです。

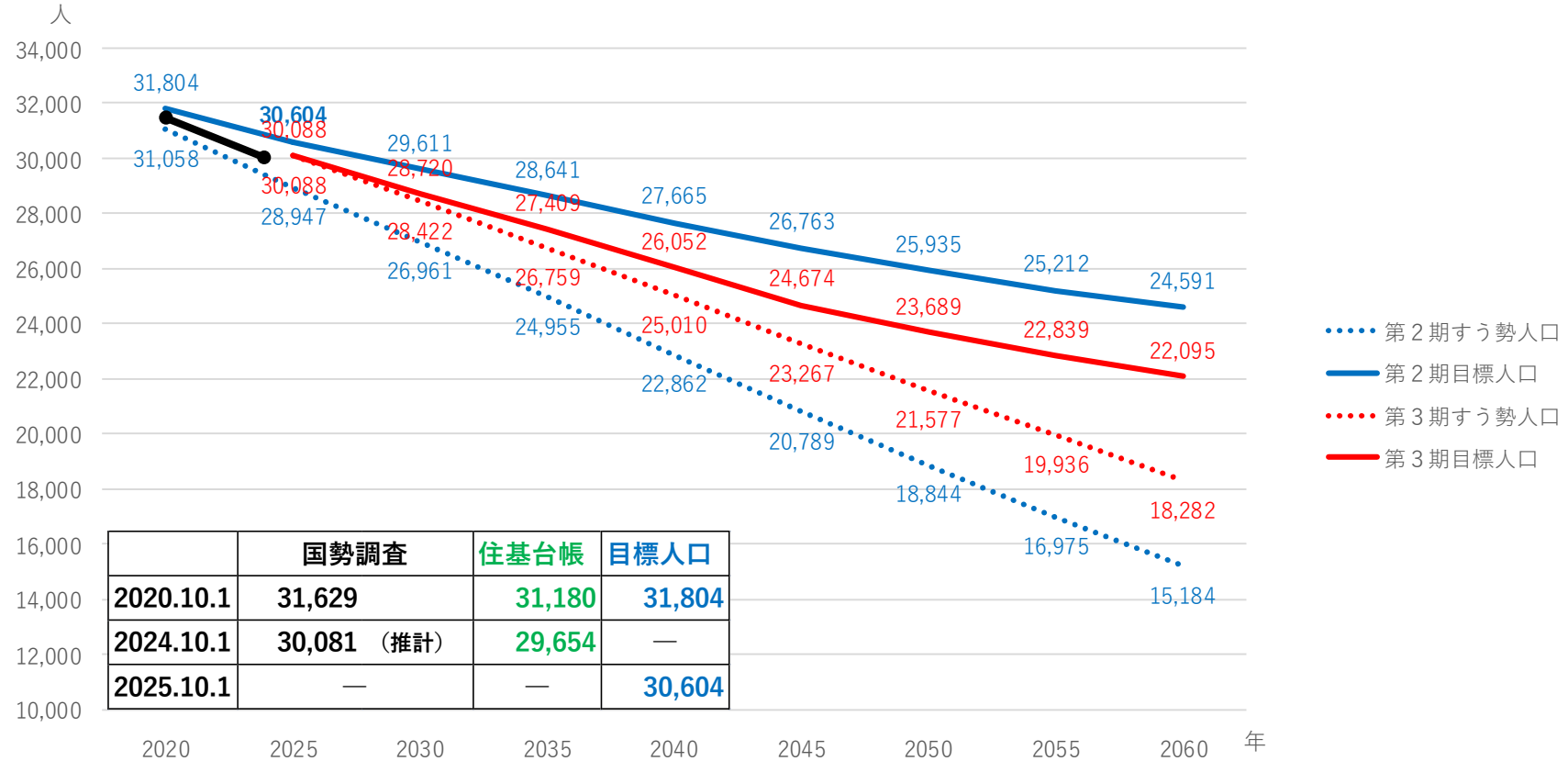
今後は、地域における雇用の創出を図るとともに、経済規模の縮小を抑制するためにも生産性の向上や、労働力人口の減少を和らげるために、女性や高齢者の活躍について力を入れていくことが重要です。

〔高齢者人口〕

高齢者人口は、2020年をピークに減少傾向になることが想定されますが、人口構造における高齢化率については、上昇傾向で推移していくものと想定されます。

既にアクティブシニア世代とも呼ばれる団塊の世代は高齢者に含まれており、こうした比較的元気な高齢者に一人でも多く活躍していただくことが、人口減少期における市の活性化には不可欠と考えられます。

人口ビジョン 実績・すう勢人口・目標人口の比較



- ・ 2020 年 10 月 1 日現在の人口は、国勢調査は **31,629** 人、住民基本台帳人口は **31,180** 人と 449 人の差があります。
- ・ 2024 年 10 月 1 日現在の住民基本台帳人口は、**29,654** 人となっており、上記の差を考慮すると **30,081** 人と推計され、既に第2期の2025 年の目標人口 **30,604** 人を 523 人下回る結果となっています。
- ・ これまでの人口の推移（毎年人口が減少）を踏まえると、2025 年の目標人口の達成は困難であると考えられます。